ジャズで育てる 人とまちの文化



いばらきビッグバンドジャズフェスティバル実行委員長
四季文化館企画実行委員会委員

沼田隆政（ぬまた たかまさ）さん

みの～れと共に生活するスタイル
Minole Life のすすめ No.230

みの～れは健やかに育ち、11月3日で24歳を迎えました。今回は、四季文化館企画実行委員として活動する、鉾田市在住の沼田隆政さんにお話を伺いました。舞台技術を担当する阿部喜一さんとは古くからの友人。その縁から、みの～れとの長い付き合いが始まりました。

熱意が動かす 文化を育てる

子どもの頃は野球少年だった沼田さん。中学校でも野球部に入りましたが、友人に「部活を辞めるって先生に伝えに行くから、付き添ってくれ」と頼まれ、ついていくと部長から「お前も辞めるのか？」と聞かれ、思わず「はい」と答えてしまったことから退部することに。そんな時、ブラスバンド部の先生から「音楽のセンスがある」と声をかけられ、トランペットやサックスと出会いました。「野球より音楽の方が向いていたのかもしれませんね」と笑います。憧れはルイ・アームストロング。偶然のような出会いが、その後の人生を大きく変えました。

水戸工業高校では42年前にビッグバンドを立ち上げ、以来、長く生徒たちを指導してきました。大切にしているのは、ただ演奏技術を教えることではありません。「このタイミングで褒めれば、この子はもっと伸びるなという瞬間があるんです」。普段は簡単に褒めず、本当に必要な時に声をかける。そして卒業後も、音楽でもジャズでも何でもいいから、ずっと関わり続けてほしいと願っています。「自分自身がそうだったように」と沼田さん。

みの～れとの関わりが深まったのは、住民ビッグバンドをつくろうという動きが始まった頃でした。古くからの友人の阿部さんから声をかけられます。学校での指導もあり、当初は「そこまではできません」と断ったものの、みの～れ職員の熱意に押され、「少しだけなら」と協力を始めました。半年後に住民楽団が誕生。「小美玉をジャズのまちにしよう」と目標を掲げ、茨城県芸術祭「いばらきビッグバンドジャズフェスティバル」をみの～れで定番化させ、２００８年の国民文化祭では全国からビッグバンドがみの～れに集結しました。ジャズを通して人が集まり、みの～れから新しいつながりが広がっていきました。

「みの～れでは、人との関わり方や組織のつくり方など、本当に多くのことを学ばせてもらいました」。音楽を教える立場の沼田さん自身も、みの～れで人と出会い、一緒に何かをつくる中で成長できたと振り返ります。

現在は四季文化館企画実行委員として、みの～れのこれからを見守っています。音楽を楽しむ人を育て、仲間をつなぎ、地域にジャズが根づく土壌をつくってきた沼田さん。これからも、人と音楽が出会うきっかけをつくり続けてほしいと思います。

（藤田佐知子）